

【46】震度 7 の時代

昨年、元日の能登半島地震の震度は 7 とのことでしたが、地震そのもののエネルギーの大きさとは別に、その場所場所における地震による揺れの激しさを表す指標に「震度」というのがあります。

地震が発生すると、すぐにテレビが各地の震度というのを報じますから、今やおなじみの用語となっています。

震度は 0 から 7 までですが、6 弱、6 強のように枝番がついているのもあるので全部で 10 段階になり、数字が大きいほど強い揺れを表します。

震度 7 では多数の建物が倒壊し、崖崩れや地割れが生じ、道路が寸断され、死傷者も発生します。

近年、震度 7 の強い地震が頻発するようになりましたが、その先駆けは、平成 7 年 1 月（1995）の阪神淡路大震災です。

昭和 23 年 6 月（1948）の震度 7 相当の福井地震以来、実に半世紀ぶりの大地震でした。神戸を中心に甚大な被害を生じ、最終的に震度 7 とされました。

実は、震度 7 というのは、福井地震の被害が建物全半壊 5 万戸、死者 3800 人とあまりにも大きかったので、従来の震度 6 の上に新しく 7 を設けたのですが、これには少々問題がありました。

震度はマニュアルと過去の例を参考にして、気象台の係官が体感で定めていたのですが、震度 7 は建物の被害状況を調べてから決定するので、震災後何日か経ってから公表したのです。

阪神淡路大震災は震度 7 が設けられてから初めての適用例だったのですが、この遅れが国会でも追及されたので、気象庁は人に頼らない専門の震度計を各地に設置し、「計測震度」として地震発生後すぐに公表することにしました。

計測震度による震度 7 の第 1 号は平成 16 年 10 月（2004）の新潟県中越地震です。

阪神淡路大震災以降、震度 7 の強い地震は北海道から九州まで下表のように各地で発生し、しかも 30 年間に 6 回、平均 6 年おきに 1 回という高い頻度です。

いまや日本は、震度 7 の時代に突入したようです。

※近年の震度 7 の地震（死者数には行方不明と災害関連死を含まず）

発生年月	名称（通称）	死者
平成 7 年 1 月（1995）	阪神淡路大震災	6,434
平成 16 年 10 月（2004）	新潟県中越地震	68
平成 23 年 3 月（2011）	東日本大震災	15,900
平成 28 年 4 月（2016）	熊本地震	50
平成 30 年 9 月（2018）	北海道胆振地震	41
令和 6 年 1 月（2024）	能登半島地震	238